

教育カウンセラー

JECA JSEC

CONTENTS

巻頭言・池場望	1
学会第17回研究発表大会開催要項	2
私の研究シリーズ⑪・佐藤節子	4
現場訪問シリーズ②⑥・大隅晃弘	6
実践研究シリーズ②⑤・菅野涼子	7
学会紹介シリーズ②③・日本家族心理学会	9
報告・学会第13回公開講演&シンポジウム	10
・教育カウンセリングCollege in 会津大学	11
特別寄稿・大切な思い出・菅野純	11

報告・推進協議会第9回公開シンポジウム	12
活動報告・日本教育カウンセラー協会	14
・日本教育カウンセリング学会	17
・日本SC推進協議会	20
日本教育カウンセラー協会20周年記念行事	22
日本SC推進協議会の役員ならびに組織	23
ご案内・推進協第10回シンポ・公認心理師現任者講習会・SNSカウンセラー	24

巻頭言

相談指導教諭の創設

NPO法人日本教育カウンセラー協会相談役
池場 望

相談指導教諭の創設は、キャリア教育学会をはじめとする心理各学会の長年の夢でした。

1986年（昭和61年）1月31日付で、日本進路指導学会（会長：仙崎武，副会長：中西信夫，事務局長：吉田辰雄）は、福井謙一教育課程審議会会長宛に、「学校における進路指導の充実にする要望書」を建議しました。

その中で、特に注目したいのが、全国の一定規模以上の小・中・高等学校に、「定員外専門職として、児童・生徒の進路に関わるガイダンス・カウンセリングを担当する進路指導主事を配当する」という要望です。

そして同じ志をもつ者同士が一丸となって要望を実現しようと、日本教育カウンセラー協会、ついで日本スクールカウンセリング推進協議会が設立され、活動が進められてきました。

日本カウンセリング学会理事長・國分康孝，日本教育心理学会理事長・高野清純，日本進路指導学会会長・吉田辰雄，日本学校教育相談学会・小泉英二，図書文化社・村主典英らが，大同団結して，相談指導教諭の学校常設化をめざそうと運動を継続してきたのが実を結び，1999年（平成11年）10月24日，日本教育カウンセラー協会が設立されました。そして事業の1つとして，教育カ



ウンセラー（上級・中級・初級）の認定をしています。

ついで，2009年（平成21年）5月25日には，学会連合資格学校心理士認定運営機構，日本カウンセリング学会，日本学校教育相談学会，日本キャリア教育学会，日本生徒指導学会，NPO日本教育カウンセラー協会（後に，一般社団法人臨床発達心理師運営機構も参加）が結束して，日本スクールカウンセリング推進協議会が発足しました。

そして，「保育園・幼稚園・小中学校・高等学校・中等教育学校，特別支援学校，大学及び高等専門学校等において，子どもたちの学習，進路，人格・社会，健康の面における発達を援助する教育の専門家」として，ガイダンスカウンセラーを認定しています。

一方，2015年9月9日に公認心理師法が成立し，国家資格としての「公認心理師」が誕生しました。

公認心理師は，公認心理師登録簿への登録を受け，公認心理師の名称を用いて，保健医療，福祉，教育その他の分野において，心理学に関する専門的知識および技術をもって，次に掲げる行為を行うことを業とする者をいいます。

- (1) 心理に関する支援を要する者の心理状態の観察，その結果の分析
- (2) 心理に関する支援を要する者に対する，その心理に関する相談及び助言，指導その他の援助
- (3) 心理に関する支援を要する者の関係者に対する相談及び助言，指導その他の援助
- (4) 心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供

公認心理師と相談指導教諭とは共通点もありますが，ねらいや活動面での違いもあります。そこで，公認心理師の資格に加えて，ガイダンスカウンセリングの力も求められています。

第17回 日本教育カウンセリング学会 研究発表大会(早稲田大会)開催要項

【大会テーマ】

これからの教育改革を成功させるキーポイントは何か
——主体的・対話的で深い学びとなる授業改善とインクルーシブ教育推進を両立させる教育カウンセリング——

会 期：2019年10月5日(土)・6日(日)

会 場：早稲田大学(早稲田キャンパス)

小野記念講堂・3号館

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

主 催：日本教育カウンセリング学会

後 援：文部科学省

早稲田大学

NPO日本教育カウンセラー協会

一般社団法人日本スクールカウンセリング推進
協議会

■大会日程

第1日目：10月5日(土)

会 場：小野記念講堂(27号館・地下2階)

12:40～ 受付

13:00～ 開会式(理事長挨拶, 表彰式)

13:20～ 来賓挨拶

坪田知広氏(文化庁参事官, 前文部科学省児童生徒課長)

13:30～14:50 記念講演

演題：自律教育カウンセリング——主体的・対話的で
深い学びとなる授業改善とインクルーシブ教育
を両立させる教育カウンセリングのあり方——

講師：河村茂雄(早稲田大学教育・総合科学学術院教授)

15:00～17:30 実行委員会企画公開シンポジウム

テーマ：主体的・対話的で深い学びとなる授業改善と
インクルーシブ教育を両立させる教育カウ
ンセリングのあり方——現場からの提案——

統括討論者：河村茂雄

コーディネーター：小野寺正己(早稲田大学講師)

話題提供者：伊佐貢一(魚沼市立湯之谷小学校校長)

粕谷貴志(奈良教育大学教授)

荏間澤勇人(会津大学教授)

熊谷圭二郎(千葉科学大学准教授)

18:00～20:00 情報交換会

会場：コットンクラブ(新宿区高田馬場)

・大会実行委員長挨拶

・次年度開催支部の実行委員長挨拶

第2日目：10月6日(日)

会 場：3号館

9:00～ 受付

9:20～10:50 ポスター発表

一色翼	教師にとっての“挑戦”とは
関大也	大学生の所属サークル・部活動に対する認知とアイデンティティの実感としての充実感との関係
井口武俊	学級担任が行う児童への情動的足場かけに関する研究
當麻晴仁	行動レパートリーを用いた学習意欲向上の試み
大友志津子	学級経営に生かすエゴグラム活用と現場の課題について
高橋卓郎	グループアプローチで生徒が作るネット・SNSルールの授業実践
笠井敬祐	特別支援学校でのQ-U活用の可能性
高橋幾	アセスメントに基づく学年内での連携の取り組み 特別な配慮を必要とする児童が在籍する学級への対応
石井数真	「キラキラプログラム」による心理教育の展開(4)
出川久枝	小学生のハイパー Q-Uの結果と生活習慣の関連
川俣理恵	中学校における授業でのグループ学習の実践効果の検討
長谷紗希	知的障害特別支援学校高等部におけるアセスメントに基づくSSTプログラムの作成と実践
河村明和	学びに向かう力の測定についての検討
平田千早子	学生の満足を高める保育士養成課程養成技術におけるアクティブラーニング手法を取り入れた授業展開について
河村昭博	小学校教員によるユーモア表出に対する児童の認知と学級生活満足度尺度との関連
平山佑樹	学級集団の実態を把握した上での席替えを考察する
熊谷圭二郎	高校時代における協働的な体験が大学初年次の学校適応に与える影響について
藤田道子	地域で行うキャリア教育の有効性について
蔵岡智子	通信制高校における卒業生追跡調査
藤原和政	親和動機と学校生活満足度の関連
齊藤勝	異年齢交流活動が児童の成長に与える影響に関する研究
藤原寿幸	教師用自己評価アンケート等を活用した学級経営コンサルテーション
杉山雅宏	悩む若者の未熟な心に関する考察
本田真	PM型指導行動の学級担任による満足型学級が孕む課題の検討
長しのぶ	自己否定的な認知を改善するための授業実践

水谷明弘	コミュニケーション・スキルと共感性の向上を目的とした大学入学前プログラム実践効果の検討
林潔	初期の看護実習のための人間関係訓練の試み
水野邦夫	授業でのSGE体験を参加者はどのように捉えたか？
深沢和彦	教師の児童生徒理解力と児童の学級適応感との関連の検討
宮崎竜将	キリスト教教育における子どもたちと作る授業設計
渡部昌平	教員志望度の変化に関する探索的研究
森恵子	教室環境での外国語学習に関わる問題理解と支援のための方策
森俊博	いじめに関する基礎知識の理解を通したいじめ予防の取組
森永秀典	教員組織への所属意識と教員の資質能力との関連
柳瀬栄三郎	Q-Uがトップダウンで導入された学校での教師支援

9:20～10:50 口頭研究発表（オープン）

1	和泉光則	VOICEROID楽曲『Seyana』の歌詞を題材とした傾聴エクササイズ
	石丸裕士	対話のある授業を取り入れた多科目関連型高専機器分析授業
2	上田明美	「わくわくミュージック」プログラム
	伊藤友彦	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の取り組みとSGEの関連についてのパイロットスタディ
	三品絵美	女子生徒Aに対する個別支援・SGE活用支援の効用
3	大和田真利	高等学校での教育相談室の運営と生徒理解について
	松浦賢一	SNSを活用した中高生の相談体制の構築に関する調査研究
	上代繁	長期キャンプにおけるメンタルヘルスサポート
4	菅原源	生徒の問題行動に関する担任としての対応
	馬場理賀	相談室常駐カウンセリング担当による支援体制の構築
	前川洋子	保育所における外国につながる親子への心理的支援
5	松下眞治	就職希望生徒同士および教員による面接指導の新たな試みについて
	羽田野忠	専門高校1年生の発達課題に取り組む教育実践
6	小川千里	教育現場における教育者と才能教育下のアスリートとの多重関係
	林まゆみ	教育カウンセリングの考えと手法を生かした学校づくり

真鍋孝徳	集団心理療法に学ぶ発達支援の一指標
------	-------------------

9:20～10:50 事例研究発表（クローズ）

1	柳瀬啓史	「生き方・在り方」を模索する学修の展開
	西村健	青年中期（高校生）の発達課題に応える授業実践について
	吉川正剛	発達障害のある大学生のキャリア発達
2	箱崎麻奈美	通う場所探し
	鈴木久子	マイナス思考で自己肯定感の低い子への対応
	根田真江	吃音で悩む中学生へのチーム支援
3	後藤玲子	生徒と一緒にホワイトボード教育相談の実践
	福島直美	A男が教室復帰をするまで
	松岡邦幸	キレるA男の対人関係構築サポート
4	殿木道子	出生時より18年間を、施設で育った生徒の自立支援
	内野博之	パーソナリティー障害が疑われる保護者と小6、小1兄弟児童への支援（その後）
	井桁明美	強迫性障害を抱えた子どもへの虐待を繰り返す母と知的障害の児童に対するチーム支援の在り方
5	阿部千恵子	不適応傾向生徒への支援報告
	木嶋葉子	保健室で情緒の安定を図り、教室復帰したA子への支援

9:20～10:50 ミニ研修会

1	佐藤節子	解決志向のホワイトボード教育相談
2	住沢佳子	事例をまとめてみよう
3	勝田みな	夢と希望をかなえるキャリア教育

11:00～13:00 自主シンポジウム

1	入駒一美	学校危機対応における養護教諭の役割
2	笠井敬祐	生涯発達を支えるための教育カウンセリング パートⅡ
3	荻間澤勇人	学級経営コンサルテーションをどのように成功に導くか
4	林潔	カウンセリングと「読書療法」
5	真鍋孝徳	支部活動を軸とした自発的（自分の現場・地域）活動の在り方 PartⅡ
6	水上和夫	非認知能力（社会情緒的能力）を育てる対話のある授業
7	渡部昌平	「教員・保育士になりたい」と自信を持って言える学生の育成に向けて

終了後、閉会（閉会式はございません。）

私の研究シリーズ 17

解決志向のホワイトボード教育相談

—チームで行う教育相談の柱に—

上級教育カウンセラー
佐藤 節子

I はじめに

山形県教育カウンセラー協会（代表：松崎学）では、発足以来、養成講座と年3回のステップアップ講座を休みなく実施しています。イベントとしての研修会のほかに、日々直面する事例を検討する機会として、ここ10年ほど、「この指とまれ」の名称で、「解決志向のホワイトボード教育相談（ケース会議）」を実施しています。

月1回の会は、現在県内4カ所に広まり、ケース会議の方法、また貴重な事例を通して、学校カウンセリングのあり方を考えるとてもいい機会になっています。また、ときには教育関係者以外の方の参加もあり、私たちの視野を広げてくれます。

II 必要から生まれた教育相談（ケース会議）

「ため息の多い会議」「『様子をみましょう』で何も変わらない会議」と、評判が悪いのが校内でのケース会議。筆者（佐藤）にとって、どうしたらより効率的で効果的なケース会議になるのかは課題でした。

III ファシリテーションとの出会い

そんなときに筆者が出会ったのが「ファシリテーション」です。「ファシリテート」とは、「促進する・容易にする・円滑にする・スムーズに運ばせる」が元の意味です。すすめる人（ファシリテーター）は、中立的な立場で、チームのプロセスを管理し、チームワークを引き出し、そのチームの成果が最大となるように支援します。

集団の意思決定の納得度は、内容もさることながら、どのように物事が決まっていったかというプロセスに大きくかわるのです。ファシリテーターの基本的な仕事をあげてみます。

- ① 場をつくり、つなげる……何を目的にするか、誰を集めるか、どういうやり方でやるかを設定する。会議のデザインをする。
- ② 受け止めて引き出す……傾聴と質問、やわらかく主

張して話し合いを方向づける。

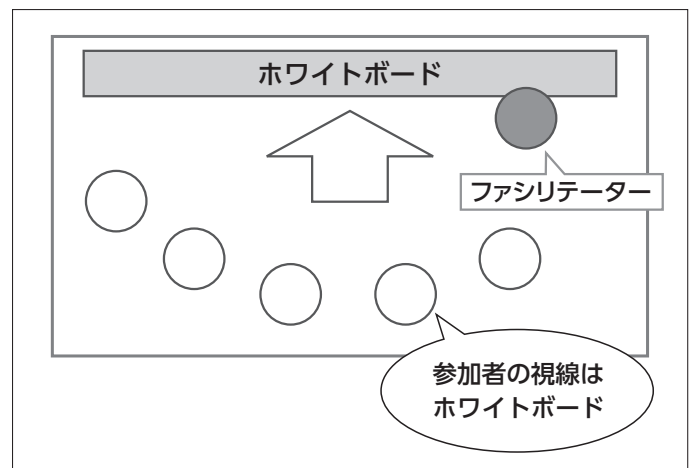
- ③ かみ合わせて整理する……あいまいな主張を明確にし、議論を書きとめていく。
- ④ まとめて分かち合う……創造的な合意に向けて意見をまとめていく。

「共有」「発散」「収束」「決定」の順序をたどって進めるのが基本です。話し合いを描くときのフレームは、目的に応じて多種多様です。

IV ホワイトボード教育相談の準備と進め方

筆者はファシリテーションを生かしたケース会議を「ホワイトボード教育相談」と名づけ、支部活動や学校でのケース会議に生かしてもらっています。準備と流れは以下のとおりです。

- ① 担当者は、事前に会議の案内をします。会議の開始時刻と終了時刻・目的を知らせます。可能であれば、保護者もチームの一員として参加をお願いします。保護者は最も大切なリソースです。場合によっては苦戦をしている児童生徒本人が話し合いに加わることもあります。保護者・本人が入るときは、特にこれまでのたいへんさをねぎらい、参加の意欲をコンプリメントします。
- ② 事例報告書は特に作成する必要はありません。知能検査や学力検査、絵や作文の作品やQ-Uアンケートの結果等があれば持ってくるように頼みます。会場には、ホワイトボード、人数分の椅子、マーカー（黒・青・赤）とデジカメを用意します。ホワイトボードがないときは、紙や黒板で行うことも可能です。全員がホワイトボード前にいるので、テーブルは必要ありません。立っての会議もいいものです（サクサク進みます）。



【会場レイアウト】

- ③ 担当者は、ファシリテーターとしてホワイトボードと参加者の間に立ち、ホワイトボードに記録をしながら進めます。参加者は個人のメモはとりません。「グループメモリ」として終了後にデジカメで撮影することにしています。研修会では撮影できるのは事例提供者のみです。

V ケース会議の大前提は「解決志向」

「何が原因か」「誰が悪いのか」の話し合いをしていくと、そこから抜け出すのはたいへんです。話し合いも暗くなりがちに。そもそも教育は、「医学・感染症モデル」（症状をよく調べ、病原菌などの原因を特定し、治療計画を立て処置する。何が足りないか、そこを補うためにどうすべきかを考える。）ではないことが多いのです。「良いところを認め、見守り、伸ばす。」
「『あるもの』を探す。すでに『あるもの』『持っているもの』を役立つように活用することを考える。」
「何が『できているか』を探す。」
「困難な状況でどうやって『がんばって』いるかを考える。」

そこに目を向けていくことで、苦戦している本人・保護者・教師を勇気づけることができると考えます。

では、アセスメントはまったくしないかということ、それは個人に任せています。ただし、会議の目的が「情報交換」「アセスメント」であれば、目的に沿って進めていきます。

私たちの「ケース会議」は「解決志向で行う」ということを最も大事にしています。そのほかにも基本的な考えのすり合わせが必要です。それがないまま会議を始めると、原因探しに多くの時間を費やし、堂々巡りの精神的・抽象的な取り組みになってしまうからです。

- ① 解決志向・未来志向であること
- ② チームで援助する（チーム援助）
- ③ アセスメントに基づいた対応（特別支援）
- ④ 学級・家族等のシステム（システム論）
- ⑤ 勇気づけから出発する（アドラー心理学）

VI この会議のメリット

① 時間的負担が少ない

会議のはじめに、目的と終了時刻を明確にします。限られた時間の中で、よりよい方法を出そうと参加者全員で知恵を絞り合います。

② 目的がぶれない

目的を明確に示しているために、役に立つ情報や方法

に話題が集中します。「誰が、何を、いつからいつまでやるか」という具体案が納得感を伴って確認されます。時には目的のメンテナンスも必要になります。

③ 話し合いが見える

ホワイトボードに話し合いを描き込んでいくことによって、チームで対応策を考えているという実感があります。また、デジカメで撮影し印刷することで、そのまま記録になります。次回はその記録の確認からスタートします。つまり個人メモリーから共有メモリーになり、記憶ではなく記録を大切にできる会議になるのです。とにかく描く、とっさに漢字が出てこなければカタカナでよいのです。

④ 対応の多様なアイデアが出やすい

ブレインストーミングでアイデアを考えるために、互いの経験や知識が触発されて多様な対応策が出やすくなります（アイスブレーキングでブレストも）。

⑤ 参加している実感がある

ホワイトボードに意見が描き込まれることによって、個人の意見が平等に扱われ、参加意欲が高まります。特に担任や保護者は、責められる感が少なくなります。

⑥ 途中参加してもわかりやすい

遅れて参加した場合も、ホワイトボードの記録を見て、どんなことが話し合われているかわかります。

【記入例】

ケース会議 ○月○日 16:00～16:30

小5年 A男

目的：午前中に安心して登校できるように支援したい

状況（担当の報告と質問）

- ・現在週2回夕方登校
- ・漢字練習が好き……

……

- ・家庭訪問では……

- ・犬を飼っている
- ・近くの公園で友達と……
- ・塾には……
- ・祖父母が協力的……
- ・ポケモンが好き

具体的な援助案（青で）

- ・3分登校から始める
（計画より少なめに）
- ・**身体計測に誘う**
（養護教諭）
- ・**家庭訪問で、犬と仲よくなる**
- ・**母親の気持ちをとにかく聴く。**
（〇〇先生）
- ・母親の話から例外探しをする。
- ・母親を勇気付ける（SC）
- ・カレンダーにシールをつける
- ・**保健室の手伝いをしてもらう**
（養護教諭）
- ・交換日記をする
（学校の話以外で）

次回 月 日 時

現場訪問シリーズ26

山形県立霞城学園高校

山形県立霞城学園高校校長 大隅 晃弘

本校は、Ⅰ部（午前定時制）・Ⅱ部（午後定時制）・Ⅲ部（夜間定時制）・Ⅳ部（通信制）からなる多部制の単位制高校である。校舎は山形駅に直結し、多くの公共施設や商業施設が集う多機能高層ビル「霞城セントラルビル」に置かれている。

初代校長の秋山将博先生は「本校設立の目的は、多様な生徒の多様な学習ニーズに対応する場を作り上げることである」と述べている。そのために、交通至便の地に、多部制単位制高校という柔軟な教育システムで「いつでも、だれでも、どこでも学べる」高校として本校は設置された。

本校は「多様な学習歴をもつ生徒」が集まってくる学校であるが、小学校・中学校時代に不登校・いじめ等の経験で心に傷を負った生徒も少なくない。そこで、そのような生徒を支援するために、例えば次のような重層的な支援体制を意識して、組織的な対応に努めている。

一次支援	UD授業、ライフスキル、キャリアガイダンス等
二次支援	前籍校からの引き継ぎ、個別面談、家庭との連携
三次支援	SC・医療機関との連携、支援チーム、通級指導

これらの支援体制の中心になるのが、希望のつばさ支援委員会である。この委員会では校内研修会を企画したり、個別の支援チームを結成したりするほか、「希望のつばさ相談活動」として月3回程度相談日を設定し、担当の教員が対応している。また、個別面談以外にも「おしゃべりサロン」として、通信制のスクーリングに合わせて、複数で学習サポートや話ができる場を開放したりしている。このように学校の中で、生徒の話に耳を傾ける場を設けるように心がけている。

平成27年から3年間、国の委託事業として「多様な学習を推進する高校推進事業（CSプロジェクト）」に取り組んで、外部のキャリアカウンセラーや多様な就労支援組織を活用しながら、校内のキャリア支援体制を築いた。その成果として、平成31年春には、定時制卒業生の半数以上が就職した。本校の開校当初は、卒業生の4割が進学し2割程度が就職する状況であったが、現在は就職する生徒のほうが多い。この背景には、地元企業の深刻な人手不足もあるが、本校の生徒の実態として、卒業するだけで精一杯で、その後まで思い描けなかったものが、適切なキャリアカウンセリングで卒業後までも意識できるようになったと考えられる。

Ⅶ 解決志向のホワイトボード教育相談の実際

それでは進め方について紹介します。

実際には前頁「記入例」のように、ホワイトボードにファシリテーターが描いていきます。情報は黒、援助案は青、すでにやっていて続けたいこと、これからやってみたいことは赤で下線を引いたり囲んだりします。

【進め方の基本】

【解決志向のホワイトボード教育相談】(30分+)

- 1 会を開き、ルールを確認する(1分)
 - ・終了時刻 ・会の目的
 - ・解決志向で臨むこと
- 2 事例報告者の話を聞く(5分)
 - 5分で打ち切りあとは質問で。
 - 家族関係はジェノグラムで描きます。
 - 友人関係も図示していきます。
- 3 質問タイム(5～10分)
 - リソース(例外・強み)を聞いていく。
 - 参加者が順番に聞いていくこともある。
 - (この目的で良かったかという『目的のメンテナンス』を行うこともある。)
- 4 ブレーンストーミングで改善案(5～10分)
 - 青のマーカーを使って書いていきます。
 - ・一つ一つ説明しないでどんどんあげていく。
- 5 実施することを決定する(赤で囲む)(5分)
 - 誰が 何を どのように
 - いつまでするか
- 6 次回の会の日時を決める(1分)

Ⅷ 終わりに

ホワイトボード教育相談を実施したら、大きく動き出したという報告をたくさん聞きます。「なんともならない」と思い込んでいた状況から、こんなこと、あんなこととアイデアが浮かびます。さらに、お互いの関係が良くなるのが何よりよいのかもしれません。

筆者は、中・高のスクールカウンセラーをしています。個人の教育相談も、解決志向の例外探しやスクーリングを入れながら、すべてホワイトボードに描く方法で行っています。「がんばっている自分に気づいた。」「頭の中がすっきりした。」と生徒自身にとっての気づきが多いのです。

「可視化する教育相談」「チームで行うカウンセリング(当事者は大事なチームの一員)」について、実験・実践をさらに深めたいと考えています。

実践研究シリーズ— 25

知的障がい教育特別支援学校でのSTEP的アプローチ

山形県内特別支援学校教諭 菅野 涼子

1 はじめに

私は現在、知的障がい教育特別支援学校に勤務している。学生のように、松崎学先生（山形大学）から＊STEPを学び、その後小学校教諭として5年間勤務した。通常の学級の子どもたちへの指導の中では、STEPで学んだことは、どれも有効であると感じることができ、特に「ほめるのではなく勇気づけを」ということを意識して取り組んできた。

その後、知的障がい教育特別支援学校に勤務することとなり、初めは知的障がいのある子どもへは、STEP的アプローチは用いにくいと思っていた。なぜならば、

＊STEPは、子どもを勇気づけ、積極的に責任感のある子どもに育てられる親になるためのトレーニングプログラム（Systematic Training for Effective Parentingの略）である。何千人もの親の協力を得て、有効だと確認した子どものしつけについての、いわば「哲学」と言えるもの。この考え方をさらに推し進め、ティーンエイジャー・思春期の子どもたちを勇気づける「STEP／ティーン」ができた。現在、子育て中の親たちが直面しているさまざまな問題の解決策を見出すために、アドラー心理学にも通じる「STEP」に紹介された考え方を学習し実践しながら身につけていくプログラムである。子育てに役立つ重要な原則や手順を知ること、子どもとのより有効な触れ合いをつくることができる。時間が無いなどと言い訳をする前に、時間が無いからこそ効率よく子どもにやる気を起こさせる親になるのである。

思春期の子どもたちは、受験戦争のまっただ中にあり、さらには「性」の問題や「職業の選択」ひいては「生き方」の問題等に直面している。こうした子どもたちの現実に親が少しでもかかわることができるのであれば、それは子どもたちを励まし勇気づけることになる。「STEP／ティーン」により思春期の子どもたちと上手に付き合う方法をマスターし、親子の間に起こりうるさまざまなトラブルを未然に防止することができるようになる。テキストには、「STEP／ティーンガイドブック」を使用し、学校現場でも活用されている。

言葉でのやり取りが上手くできなかつたり、抽象的な事柄を理解することに困難さがあつたりする子どもたちだからである。しかし、実践を重ねる中で、知的障がいのある子どもたちにも、STEP的アプローチは十分に有効であると感じることができるようになった。

以下、ダウン症児へのSTEP的アプローチを用いた実践について紹介する。

2 ダウン症児へのSTEP的アプローチ

(1) 対象児

ダウン症で重度の知的障がいがあるA児（小6女児）。年中より保育所に入所し、特別支援学校小学部に入学した。筆者は6年次での担任である。

(2) 主たる問題

教師の言葉を聞き、理解し行動する力はあるが、教師の言葉や直接的な促しを待っていることが多く、自分から行動することができない。

(3) アセスメント

重度の知的障がいであるが、排泄、着替え、食事など身の回りのことを自分で行うことができる。発音の不明瞭さはあるが、簡単な言葉でのやり取りができ、会話をすることができる。日常生活の中で、言葉での指示を理解することができ、行動する力もあるが、できないことを示すと周囲の人が代わりにやってくれるという経験をしてきたことや、主体性が育っていないことから、教師の促しや直接的なかわりを待ち、自分から行動に移すことができない状態であると考えた。

(4) 目標と対応方針

A児が教師の促しを待たずに自分から行動することを目標とした。A児は自信があることや、自分の行動が認められると、意欲的に行動することができるため、以下の方針を決め、取り組んだ。

① 認められる場面を多く作り、勇気づけを行い、自分から行動できるようにする。

- ② 「関心を引く」行動には反応せず、よいところに注目し生かすようにする。
- ③ スモールステップで支援するとともに「できる」と信じて任せるようにすること。

(5) 課題の把握

A児の日常生活の中で、課題となる場面について取り上げ、検討した。課題となる場面ごとにA児の行動について実態把握を行い、なぜそのような行動をとるのか背景を考え、「好ましくない言動」の目標を判断し、STEP的アプローチを行いながら支援を行った。

- ① 場面1……1人で着替えることができるが、動きが止まってしまい、時間がかかる。

A児は4月の段階では、着替えの際に支援を必要とせず、1人で更衣室に行き、着替えを終えて教室に戻ってくることができた。しかし更衣室に行ったきり、20分以上も戻ってこないことが多くあった。

A児の着替えに時間がかかるのを観察した。すると、その日の活動で体力を使い疲れているとき、暑いとき、体調がすぐれないときに、特に時間がかかることがわかった。しかし、次の活動への意欲があるときには、10分程度の短い時間で着替えを終えられることがあった。

そこで、支援として次のことを行った。

- A児が着替えているときに様子を見に行き、声をかける。
- 動きが止まっているときに手伝う。
- タイマーを使用し、終わりの時間を示す。

しかし状況は改善しなかった。そこで、A児の好ましくない言動の目標を推察し、「無気力」と「関心を引く」と考えた。

- ② 場面2……給食のときに「いただきます」の挨拶をしても、固まってしまい、自分から食べ始めることができない。

A児は野菜が苦手で、学級のほかの児童の倍近くの時間をかけて食事をしていた。また、「いただきます」の挨拶は、教師の促しを受けて、みんなと一緒にするが、その後うつむいたまま動きが止まってしまっていた。さらに、教師が促さないと食べ始めることがなかった。しかし食べ始めると、ご飯や肉など好きなメニューはどんどん食べることができ、励まされると、苦手な野菜も食べる様子が見られた。

そこで、促しをせずに、自分から挨拶をしたり、食べ始めたりするのを待つようにした。しかし、待っていても自分から行動に移すことはむずかしく、改善は見られなかった。これらのことから、本児は「苦手なものを食べさせることはできない」という意思を示していると推察し、好ましくない言動の目標は消極的な抵抗の形での「主導権を握る」と「関心を引く」とであると考えた。

- ③ 場面3……掃除のときに教室でうずくまったり、固まったりして、取り組むことができない。

A児はほうきを使ってごみを掃く、ちりとりを使ってごみを取る、雑巾で床を拭くことができる。気持ちが向いているときは、自分から張り切って掃除をすることができた。しかし、掃除が始まり、ほかの児童が活動を始めても、教室の隅でうずくまったり、立ち尽くしたりしていることが多くあった。

そこで、支援として教師が誘ったり、手を取って立ち上がらせたりした。しかし、誘ったときは掃除をするものの、気持ちが向かず最後までやり遂げることができなかったり、何度も促す必要があったりした。これらのことから、本児にとって嫌な活動である掃除をやらなくて済むように抵抗を示していると推察し、好ましくない言動の目標を「主導権を握る」と考えた。

(6) 介入とその変化／経緯

- ① 場面1……着替え

次の活動への意欲があるときには、早く着替えを終えることができたことから、着替えのあとに本児の好きな音楽を教師と一緒に聞く時間を設定した。さらに、着替えの途中や戻ってきたときに、「がんばっているね」「早かったね」などとA児の努力を認める、勇気づけをした。

また、更衣室内で寝転んでいるときなどには、声をかけないようにした。これらの関心を引く行動は無視し、建設的な行動を勇気づけによって強化する支援を継続した結果、3学期には、教師の促しがなくても自分から着替えを終えて戻ってくることができるようになった。15分以上かかっていた着替えに要する時間も、10分程度になり、早いときには5分ほどで終わられるようになった。

- ② 場面2……給食

挨拶をしてもすぐに食べ始めないことは、関心を引く行動と考え、教師は声をかけずに茶碗や箸を手渡すようにした。そして、A児が食べ始めた後に、「おいしいね」などと言いながら楽しい雰囲気でするようになった。また、苦手なものを自分から食べ始めたときには、「がんばっているね」とA児の努力を認め、勇気づけをした。さらに配膳したものを見て、自分で減らす必要があるものを判断できるように問いかけるようにした。

A児のがんばりを勇気づけすること、自己決定する機会をもつことを続けたところ、3学期には、みんなと一緒に挨拶をし、教師から促されることなく食事ができるようになった。苦手なものは自分で食べられる量を伝え、ほぼ残さずに食べられるようになった。

- ③ 場面3……掃除

A児がうずくまるなど関心を引く行動をとっているときには、視線を向けずに、背中に触れて行動を促すよう

にした。また、役割を固定し、繰り返し取り組むことで、見通しをもって行動できるようにした。

初めのうちは、教師がほうきやちりとりを手渡し、すぐに次の行動に移ることができるようにした。自分から掃除を始めたときには、うまくできているところを「きれいにゴミがとれたね」などと伝えた。さらに、「Aさんのおかげできれいになったね。ありがとう」と感謝の気持ちを伝える勇気づけを行った。

これらの支援を行ったことで、3学期には、教室の隅に立っていることはあるが、うずくまる前に、背中に触れて行動を促すことで、自分で動き始められるようになった。また、教師が促さなくても、友達が自分の役割に取り組んでいる様子をしばらく眺めると、自分で動き出すことができるようになってきた。

(7) 考 察

A児はこれまでの経験から、「手伝いがないと自分ではできない子」であるとみなされ、自発的に行動する機会が少なかったと推察される。そのため、「関心を引く」言動や、やるべきことをやらないこと、「主導権を握る」ことで存在感を得る方法を身につけてきたと思われる。本児に合った目標を設定し、それに向けてスモールステップでの支援を行うこと、勇気づけにより建設的な言動を強化することで、児童の自発的な言動を引き出すことができた。

3 おわりに

知的障がいのある子どもたちへSTEP的アプローチを行う際には、その特性に合わせ、勇気づけを中心に、具体的な短い言葉で簡潔に、即時に行うことが効果的である。さらに、「ありがとう」という貢献への感謝の言葉は、普段はサポートを受けることが多い子どもの能力への信頼を示す意味で重要である。

知能検査による数値では、知的な遅れが重度のレベルにある子どもでも、他者とかかわりをもちたい、思いを伝えたいという気持ちは大いにある。できないこと、支援が必要なことに目が向けられがちな子どもたちであるが、一人一人に「できる力」があると信じて、一緒に取り組んでいくことを私は大切にしている。教師の勇気づけや建設的な言動は、児童の行動に大きく影響する。普段から「ありがとう」「助かったよ」という言葉を使っていると、子どもたちの言動も変わっていく。「先生、自分でできたよ」「ぼく、できるよ」そんな言葉や行動が見られることをめざして、今後も取り組んでいきたいと思う。

アドラー心理学にも通じるSTEP的アプローチの実践報告です。

学会紹介シリーズ23

日本家族心理学会

日本家族心理学会は、校内暴力・家庭内暴力・非行・いじめなど、子どもたちの心の「荒れ」が社会問題化し、「家族の危機」が叫ばれていた1984年、家族心理学領域の研究と実践を推進し、その進歩および普及に貢献することをめざして創設された学会である。

会員数は800名前後であり、会員構成は、大学の研究者をはじめ、医療・福祉・司法領域で家族の支援にかかわられている現場の先生方、小中高等学校の先生方等が中心であるが、サポート校の先生や区役所の行政職員、消防士の方等も加入されている。

学会のプログラムの合間の時間帯や懇親会の席では、さまざまな領域で活躍されている多様な職種の方々が、「家族」や「家族支援」をキーワードに、情報交換や意見交換をされている。中学校・全日制高校・通信制高校、サポート校、スクールカウンセラーの先生方が生徒について論じ合う光景は、異業種交流会のようでもある。また私個人の印象であるが、学会自体がアットホームで、会員同士がまるで家族のように感じられることもある。

学会設立当初と比べると、家族のあり方（親子関係・夫婦関係・家族構成）も時代や社会の変化に伴い、ずいぶんと変化してきたように思う。学会誌である『家族心理学研究』や『家族心理学年報』、『大会発表論文集』に掲載された論文を振り返ると、家族システムという独自の組織、社会における関係性に焦点を当てた研究が多くを占めることに気づく。また、家族支援を通じた個の支援である家族療法や、ブリーフセラピー・ナラティブセラピーの実践研究も数多く行われている。

なお、2019年9月21日(土)～23日(月・祝)に日本家族心理学会第36回大会が開催される。

○大会長：奥野雅子先生（岩手大学）

○大会テーマ：「家族・スピリチュアリティ・美」

○会場：岩手大学および岩手県民情報交流センター「アイーナ」

宗教学者（チベット仏教）でもあり脳科学者でもある永澤哲先生（アティ・ゾクチョン研究所所長）による大会特別講演（「身心変容の科学とスピリチュアリティーチベット仏教の視点から」）や、家族支援に関するさまざまなワークショップも行われる。ご興味・ご関心がおありの先生方は、ぜひご参加を検討いただければ幸いである。詳細は、日本家族心理学会第36回大会ホームページ（<http://jafp2019.org/>）を参照されたい。

（文責：山形大学 佐藤宏平）

報告

日本教育カウンセリング学会
第13回公開講演&シンポジウム人生100年時代のキャリア発達を支える教育
カウンセリング(1年目)—新学習指導要領を踏まえて子どものキャリア発達を
どう支えるか—

日時: 2019年5月19日(日) 12:30~16:30

会場: 早稲田大学 早稲田キャンパス

主催: 日本教育カウンセリング学会研究委員会

後援: NPO日本教育カウンセラー協会

日本スクールカウンセリング推進協議会

◆公開講演

「これからの時代のキャリア発達」

講師: 下村英雄(独立行政法人労働政策研究・研修機構
キャリア支援部門主任研究員, 日本キャリア教育
学会会長)

◆公開シンポジウム

「新学習指導要領を踏まえて子どものキャリア発達をど
う支えるか」話題提供者: 小学校・海藤美鈴(板橋区立中台小学校校
長)
中学校・清水隆彦(荒川区立第三中学校校
長)
高校・千葉吉裕(全国高等学校進路指導協
議会事務局長)指定討論者: 河村茂雄(早稲田大学教授・日本教育カウ
ンセリング学会理事長)

事後アンケート集計報告

研究委員会

◇参加者数

- ・学会員——107人(早稲田大学学生8名含む)
 - ・非学会員——14人
- 計121人

◇参加者プロフィール(アンケート回答者87名)

※無答の項目あり

- ・性別・男—43人(49%) ・女—44人(51%)
- ・年齢
 - ・20歳代—1人(1%) ・30歳代—4人(5%)
 - ・40歳代—11人(13%) ・50歳代—30人(34%)
 - ・60歳代—30人(34%) ・70歳代—7人(9%)
 - ・80歳代—2人(2%) ・不明—2人(2%)
- ・職業
 - ・幼稚園関係者—0人(0%)

- ・小学校関係者—12人(14%)
- ・中学校関係者—21人(24%)
- ・高校関係者—11人(13%)
- ・特別支援学校関係者—1人(1%)
- ・大学関係者—17人(20%)
- ・教育センター関係者—2人(2%)
- ・教育委員会関係者—7人(8%)
- ・スクールカウンセラー関係者—10人(11%)
- ・学生—1人(1%)
- ・その他(協会支部役員等)—5人(6%)

◇アンケート結果(抜粋)

1. 公開講演「これからの時代のキャリア発達」を聞いて、感じたことや気づいたことをお聞かせください。

- ・現場ではなかなかキャリア教育を学ぶ機会がなかったが、多くの知識、考えをもつことができた。
- ・キャリア構築理論から、教師自身が自己を振り返りながら子どもの人生にかかわることが重要だと思った。
- ・若者だけでなく人生100年時代のキャリア教育が、自身に役に立つ内容だった。
- ・お仕事探しま表を活用してみたい。演習もあり、深い学びのモニタリングができて、有意義と感じられた。

2. 公開シンポジウム「新学習指導要領を踏まえて子どものキャリア発達をどう支えるか」を聞いて、感じたことや気づいたことをお聞かせください。

- ・シンポジスト、指定討論、グループでの話し合いでの気づきが多かった。
- ・体験と教科のバランスをどうとっていくかの視点が新鮮であった。
- ・3つの校種で異なる、共通のところをわかりやすく語ってくれた。「他者のため」「正義のため」「自己肯定感」が共通していると考えられる。
- ・「キャリアパスポート」が始まるので、理論と実践を結びつける参考になった。

3. 本日の公開講演&シンポジウムは満足できる内容だったでしょうか。

- ・たいへん満足できた—67人(77%)
- ・すこし満足できた—19人(22%)
- ・どちらとも言えない—0人(0%)
- ・あまり満足できなかった—1人(1%)
- ・ぜんぜん満足できなかった—0人(0%)

報告

教育カウンセリングCollege
in 会津大学

主催：日本教育カウンセリング学会研究委員会
後援：NPO日本教育カウンセラー協会

日時：2019年6月9日(日) 9:30～16:00

会場：会津大学 講義棟 M7教室

日程

9:00～9:20 受付

9:20～9:30 開会（事務局長あいさつ・研究委員自己紹介）

9:30～12:30 研究発表（午前の部）

12:30～13:30 昼食

13:30～15:30 研究発表（午後の部）

15:30～15:45 閉会（各研究委員の講評・受講証の授与）

参加者：44人（発表者5人）

発表内容

氏名(所属)	発表論文タイトル	SV
柳瀬啓史 (高知市立介良小学校)	「生き方・在り方」を思索する学修の展開 ～年間の諸活動がキャリア教育に～	水上和夫
丹藤美津子 (会津美里町立高田小学校)	小学校3年男児と保護者に対する不登校から教室復帰を目指した事例	根田真江
永井 聡 (会津若松市立日新小学校)	自閉症傾向がある小学校2年男児へのソーシャルスキルトレーニングを用いた援助	伊佐貢一
佐々木雄一郎 (白河市立白河第三小学校)	Q-UとSGEを生かした学級づくり～充実した学校生活を“贈る”ために～	根田真江
吉田圭子 (湯川町立箕川小学校)	対人場面で暴言を吐く学習意欲の低い小学校4年女児に対する援助	水上和夫

アンケート結果

〔時期〕……良好 〔会場〕……良好

感想

◆チーム支援

・各研究発表は素晴らしかったと思います。大変参考になりました。チーム支援の仕方、ポイントがわかり、その大切さを再認識しました。グループエンカウンターを学校全体で取り組んだ事例を聞いて、たくさんの学校で実践されるといいなと感じました。

◆実践のヒント

・5人の先生方の現場目線の実践は、どれも具体的に興味深く、楽しみながら受講することができました。児童・担任・保護者などさまざまな立場の方々とどうかかわり、コーディネートされたのかよくわかったのが一番の収穫です。それぞれの実践の成果と課題も明らかにされていて、追試する際の留意点として有効であると思いました。多くのヒントをいただき、ありがとうございました。

◆Q-Uについて

・Q-Uの見方の学習会かと思い参加しました。実際、Q-Uの右上に上がれない子たちの支援の仕方を学ぶことができ、たいへん勉強になりました。学校で今日学んだことを伝えていきたいと思います。

◆特別寄稿◆

大切な思い出

早稲田大学名誉教授 菅野 純

地域の教育センターの教育相談をしていたころ、國分康孝先生に、教員向けの研修会の講師として何度かいらしていただいたことがあります。

初めてお招きしたときのことです。夏休みのさなか、暑い日でした。講師控室で、紺のスーツ姿で汗びっしょりになって対応する私に、先生はねぎらいの言葉をかけてくださいました。

「あなたも、大変でしょう。暑いのにきちんとスーツを着て。研修会に参加される先生方のお世話も」。

まだ二十代だった私は、先生にこんな返事を返してしまったのです。

「僕がいちばん気にしていることは、研修会に参加してくださった先生方が、その日の研修にどれだけ満足して帰られるか、です」と。

すると國分先生は、急に襟を正して（と私には思えました）、まだ若造の私に向かって、こう言ったのです。

「ぼく、がんばります。今日来てくれた人たちが、満足して帰れるように！」

椅子からすくっと立って、壁の鏡を見て髪形を少し直し、「よしっ」と言ってから、意気揚々と研修会場に入って行きました。

その率直さ、純粹さに、私は圧倒されました。自分も國分先生のようにありたい、と願いながら、先生が歩まれた道を私なりに歩んできました。先生への感謝の気持ちは言いつくせません。

ありがとうございました。國分康孝先生。

報告

一般社団法人日本スクールカウンセリング
推進協議会
第9回公開シンポジウム 2019いじめ防止対策推進法を考える
—予防的視点の活用—

日 時：2019年6月29日(土) 13:00～16:30

会 場：跡見学園女子大学・プロッサムホール

当日は、雨天にもかかわらず、関東を中心に北海道、九州地方からも全140名（前年104名）の参加者にご来場いただきました。当日、ご登壇いただいた皆さまの多面的なお話により、いじめ防止対策推進法が施行後5年経過した時点で、改めて予防的視点にたったスクールカウンセリングとしての機能、あり方、ガイダンスカウンセラーとして果たすべき役割について理解と認識を深め、共有し合った時間であったように存じます。

◆サプライズ講演

講師：馳 浩（衆議院議員・元文部科学大臣）

松木秀彰（文部科学省初等中等教育局児童生徒課
生徒指導室長）

当初は1人30分ずつの講演予定でしたが、馳氏のご発案で、松木氏との対談形式のサプライズ講演になりました。

馳氏は、スクールカウンセラーの増員、専門性向上等に当たっての予算を獲得する重要な職務についておられる松木室長に、スクールカウンセラーに関して次の趣旨の質問を投げかけられました。

具体的には、
「いじめをはじめとする多様な課題解決が迫られている学校において、いじめ対策、災害対策、LGBT対策、その他諸課題の対応ができる資質が必要ではないか」



「特定の分野について、誰に働きかければいいのかを知っている—知っている人を知ってネットワークを構築し、コーディネートできる資質がスクールカウンセラーに求められているのではないか」

「それにあたって、スクールカウンセラーを臨床心理士だけに限定していいものか」

等の現状のスクールカウンセラーの配置・処遇に至るまで、問いを寄せられ、それはまさに、ガイダンスカウンセラーのアドボカシーとして、問題提起をしていただいたように思います。立场上お答えしにくい質問にも、誠実に応えられる松木室長のお姿も、大変印象的な対談でした。

会場の参加者からは、対談を通して改めて立法の経緯等の認識も深まったという感想も寄せられました。

◆シンポジウム

「いじめ防止対策推進法を考える—予防的視点の活用—」

司会：飛田浩昭（西武学園文理小学校長）

シンポジスト

新井 肇（関西外国語大学教授）

「5年間の取組と成果と課題」

栗原慎二（広島大学教授）

「いじめ防止対策で重点とすべきこと」

笠さわ子（東京都豊島区立千登世橋中学校教諭）

「学校現場の現実と取組み」

後半のシンポジウムでは、当協議会研修委員の飛田浩昭先生の司会により、3人のシンポジストが30分ずつ、いじめ防止対策推進法を踏まえ、予防的視点の活用等をテーマに提案がされていきました。

新井肇先生は、いじめ防止対策推進法の立法に携わってこられました。そのなかで、いじめは相手の人間性とその尊厳を脅かすものであるととらえ、「人権」を社会の基軸理念に据え、社会の成熟をめざすことが本法律の趣旨であることを強調されました。いじめの定義が広く網羅していることは、いじめをゼロにすることをめざす



くり、仕組みづくりをしているのか等の、具体的な実践例の報告と提案をされました。

参加者からは、学校で実施していくうえで、具体的に有意義な示唆を得たという趣旨の感想がたくさん寄せられておりました。

◆参加者の感想

(1) よかったこと

- ・国会議員，文科省，大学教授，学校の教員とさまざまな視点をもった方からの話が聞けました。
- ・「いじめゼロ」よりも「いじめ見逃しゼロ」をめざすことが印象に残りました。
- ・いじめ防止対策推進法ができたことで，それぞれの取り組みがわかり，参考になりました。
- ・学校図書館に関する示唆に気づきがありました。

(2) シンポジウム全体

- ・加害者も育てるという視点や，第三者委員会の実際など，今まで気づかなかったことに気づかされ有意義でした。
- ・いじめのとらえ方や対応についてなど，改めて自分が何をすべきか考えさせられました。
- ・多くの先生方が多くの場面で子どもたちのために努力なさっていることがあらためて確認できました。

のではなく、いじめ「見逃し」ゼロをめざすためにあるのだということ。ここから始まり、学校が組織として機能的に動くために、どのように学習する組織にしていくか、同僚性を基盤とした協働的指導体制にしていくか等といった観点での、理論と実践に基づく報告や提案をされました。

栗原慎二先生は、いじめ防止対策で重点となるのは、いじめという攻撃性の背後に注目することであると述べられました。人間関係、愛着の課題そして攻撃性への対処のあり方に着目し、包括的生徒指導モデルの基本的な考え方に立脚して、愛着の穴を埋める共感能力の開発、情緒的交流の機会の設定、日常的な対人関係の場の設定、問題解決・対立解消スキル、修復的正義等の方策について、具体的なデータに基づいたエビデンスをもとに、さまざまな取り組み事例や、その成果の報告や提案をされました。

笠さわ子先生は、一教員の立場として、学校においてどのような教育課題が山積しているのか、いじめ防止対策推進法を受けて、学校で何が動いているのかといった話題を踏まえたお話でした。組織の一員としての教員が、ガイダンスカウンセラーとして、いじめ防止等に向けて何をしているか。教員特有のイラショナル・ビリーフを緩めていくために、教員のタイプを把握しながら、どのような働きかけをしているのか、どのような組織づ



協会活動報告

支部代表者会議

日 時：2019年5月18日(土) 13:15～17:00

会 場：図書文化社 大会議室

出席者：支部代表者40名

開会に先だって、大友副会長よりの提案で、本年1月28日に急逝された片野智治前副会長の功績に対して黙祷がなされた。

議 事

【第1部】13:15～14:00

1 会長挨拶（河野義章会長）

久子先生が体調不良で20周年記念パーティーを欠席されるとのことで気がかりになり、昨日、急にではあったが訪問すると、いたって元気に歓待していただき安心した。その帰り、今回の挨拶では20周年なので事務的な話ではなく國分先生の話をしたと思う立った。

京大会での國分先生のスピーチDVDを視聴して、國分先生の話し上手を探る話をする。國分先生は原稿が早く上手だが、皆さんが周知のように話し方も上手だ。それは何故か。社会言語学では、スピーチでの一人称、二人称、三人称の頻度を研究しているが、國分先生は一人称が極めて多い。ここが國分節の神髄ではないか。

2 SGE（吉田理事）

・リチュアル ・インタビュー ・他者紹介

【第2部】14:00～15:30

3 各支部の現状確認と組織運営について（会費納入状況など）

楠元次長：（資料に沿って「養成講座および認定試験、SGEワークショップ開催状況」（2007～2019予定含）と、「都道府県別認定者一覧」（2019／5／10現在）を元に、その資格の会費納入等の有効有無について説明。）

大友副会長：次長説明のように認定者数、有資格者数共に減少傾向にあり、高齢化に伴う自然減も含めて分析をし、養成講座等の改革など新しい認定者を広げていくことを探っていきたい。支部でも、資料データの現状を把握して、失効会員への声かけなど、個別のサポートをしていくとよいのではないか。

4 養成講座（部分受講について）・組織強化・國分康孝賞

水上理事：（支部の存在意義として、養成講座の開催を要請したい旨を述べ、「教育カウンセラーの育成養成

講座開催講座要項」の改正について説明。特に、変更「要項」に基づいて「講座内容の基準のチェック」「分散開催での条件」「部分受講の条件」「講師謝礼に関する規定」について説明がなされた。）

Q 愛知：①部分受講可の件では、受講者からの希望で対処するのか、開催要項に前もって可能の旨を表記して募集するのか。②講師謝礼は謝礼金と交通費プラスでよいのか。

A 水上：①富山では要項自体に部分受講の欄を設けて募集している。個別の希望対応では情報の差ができるので、要項自体への明記で募集するのが好ましい。②謝礼金と交通費や宿泊費は別と考える。

教育カウンセラー養成講座スタート&リスタート(再スタート)推進プロジェクトについて

水上：養成講座を実施できていない、またはしばらく休んでいる支部に、費用を抑えた開催の工夫など、本部から支援していきたい旨説明。支部からの意見をさらに聞いて、理事会でつめていきたい。

福岡：まだ支部活動が進んでいないので、このような本部からの支援はありがたい。

水上：宮城からの話題で、「共催はできないか、再開したいが中心スタッフが集まらない」との話題がある。まずは、実施しなければ人も集まらず、開催前提で取り組んでほしい。

大友：共催開催は高知と香川の前例があるから聞いてみるとよい。

宮城：近県のために参加者が減少することがあるので、可能なら融通し合って、2年に1度の開催など検討してもらい、先のリスタート支援と絡めるとやりやすく、ありがたい。

水上：やることをまずは考えて、そこで相談してほしい。開催に向けて進めてほしい。

Q 兵庫：講座科目が基礎講座と応用講座で被ってできると、費用面でもありがたいのだが。

A 水上：初級と中上級を併行してする場合だが、SGEと概論は別として、ほか4講座は一緒というのは好ましくない。やはりそれぞれ分けて、該当科目を履修してほしい。ただ、私見では1～2科目は被ってもいいかなと思うが、はっきりした境はなく、支部の考えと本部とで練り合わせてほしい。

高知：教育カウンセラーとしての資格と就業とのメリットの周知が重要ではないか。資格のメリットが広まれば受講者も増える。本部から教育委員会などに働きかけて、そのメリットを広報してほしい。

東事務局長：都道府県とのやりとりだが、本部からの働きかけと支部からの働きかけとの両面を考えている。都道府県一斉に手紙を送るには、それぞれの事情があ

るので躊躇する面がある。ある県の例では、支部と地元教育委員会との良好な関係性があり、そこを踏まえて本部から広報することがあった。このようなチームワークがあると各地方の事情もわかり、逆効果になる恐れもなく、安心して文書も送れて効果的だ。

兵庫：兵庫では臨床心理士が多く、教育委員会もそこに募集をかけて入る余地がない。議会にも圧力をかけているがむずかしい。臨床心理士は病理関係には強いが教育界には弱いので、その辺を手がかりに突けないものか。

東：その件はロビー活動報告も含めて、後ほどの話題にしたい。

大友：先ほどの講座内容重複の件だが、もうひとつ納得されていないようなので。講座グレードでメニューが違うに越したことはないが、北海道の例でもSGEと概論以外は同じメニューで実施し、受講者も集まっている。富山の例でも、中上級コースに必要とされるSGEがないことから、実情に合わせて柔軟に対応して、現状ではグレードの違う講座のメニューが被っても認めている点を確認しておく。

東京：東京支部は受講者減で10年前に中止した。リスタート支援の謝礼金の件や、会場の工夫をすることで低予算が可能になり、國分先生が亡き不安のなか「打って出るしかない」の決意で、来年の8月再開催する。頑張りましょう。

國分康孝賞について

大友：2年前の新理事入れ替えのときに、國分先生から「20周年時に功労賞を出すこと」を提案するように指導されたのを付度して、「國分康孝賞」とした。20周年記念のみでなく、今後5年ごとに、先生を偲ぶだけでなく、その意志をどう受け継ぎ、前進するのかを踏まえて、賞を出していきたい。今回受賞者109名。

5 教員免許状更新講習について

楠元：（導入および経過、受講者の会員非会員の推移、本年度の申し込み状況、開催にあたっての要望、留意点等の説明があり、特に「遅くとも半年前に内容が確定していること」「申請後の講師変更がないこと」「養成講座と免許状更新講習との混同がないこと」などが指摘された。）

6 討 議

青森：（青森での先行例が紹介される。）

富山：受講者が集まるこつは何か。

青森：受講者が同僚へ伝える、評判のよい口コミが大きいと思う。

水上：富山でも、一般受講者は頭打ちだが、更新受講は増えているので、力を入れたい。

東：今後ポテンシャルは高いと思う。青森の更新講習の例と、自殺対応緊急派遣について報告があった。緊急派遣業務は、臨床心理士3人と教育カウンセラー2人の5人チームで取り組んだが、教育カウンセラーは同じ仕事で半額であった。その後も緊急派遣業務は続き、昨年2月に教育長との懇談でプッシュした結果、4月より正式採用となった。このように人数が増えていけばうれしい。

【第3部】 15:45～16:30

7 SGEについて

吉田：（各支部のSGEの実施状況について報告。地方開催の場合にはSVr不足もあり、なしである場合があるが、参加者にとってはSVrのような人がいるに越したことはないので、検討してほしい。「スペシフィックSGEアドバイザーについて」資料と、昨年3月に実施した「養成ワークショップ」のオリエンテーションの例の資料に沿って説明。）

Q 愛知：①支部認定の際に認定証のひな形はあるか。②有資格者で実践を積んでいる人も、リーダー研修は必要か。

A 吉田：①本部にある。②リーダー研修でやってもらって、必ず本人を見て認定してほしい。

Q 高知：昨年北海道の審査用紙を基準に認定をしたが、実施審査の本部問い合わせは必要か。

A 吉田：問い合わせではなく、本部に申請すればよい。

Q 審査表は本部にあるのか。

A 大友：北海道独自のもので、本部にはない。

Q 鹿児島：①資格要件を満たした人は認定しているが、条件に達せず、認定はされないが勉強のために参加することはよいか。②資格要件のリーダー研修6時間以上というのは、それを受けることそのもので満たしたと考えてよいか。

A 吉田：①②支部の事情に応じてやってもらえればよい。

水上：審査表というようなものは危険ではないか。既に中上級等の資格を認定しているのに、再度審査するというのは、そもそもの資格に疑義が生じかねない。富山では、一通りの研修と要件となる資格確認で認定しているが、資格を出すことよりも、資格を使ってもらうことが大事と考える。

大友：青森も北海道も、資格認定後に実践報告書を出してもらって共有している。また認定された人が講師を務めて、次の人を育てる流れにしている。資格が実践で使えなければ意味がない。大枠は本部にあるので、各支部で方法や広報の工夫をしていってほしい。

吉田：本部のリーダーコースでも観点は出している。観点は必要。

8 ロビー活動について

堀田理事：SC推進協の一員として衆参議員会館に伺い、特に文教委員の議員に手分けして、挨拶と要望事項（ガイダンスカウンセラーのSC活用）をお願いしてきている。ロビー活動をしていくなかで、埼玉の県会議員では、活動報告に「カウンセリングを学んでいる教員も加えるべき」との見解も出されている。さいたま市や川崎市の巡回カウンセラーのなかで浸透されつつあるので、今後も根気強く活動にあたっていきたい。

加勇田理事：支部の活動報告を見ると、よいものが多い。いまより使いやすいように、HPのリニューアルを検討しているが、それらの情報を支部とリンクさせて、相互に研修に参加し合えるようにしたい。SC推進協では構成団体が多種で凸凹があるが、ロビー活動のうえでも、相互に学んで、オールマイティーのガイダンスカウンセラーをめざしている。その点、先の支部の情報を寄せてもらうこととともに、他学会とも共催するなど、支部の中での交流も進めるとよい。

また、推進協では、東京都教育委員会から河村研究室に「定時制高校の中退防止事業」として、カウンセラー派遣とSGEの1年間の試行を依頼されて、取り組んだ。実績はよく、翌年から3カ年の予算がつき、今年の3月で終了だったが、成果も上がっているのが今年も年2回の予算がついた。さらに、3回目も是非実施したいとの指導主事や現場からの意向もあり、推進協でその分を予算化した。それを受けて、高等学校教育課長名で、全都立高校に「推進協の予算で研修可能なので、希望を出すように」との周知メールが出されるまでになった。

教育カウンセラーに対しても、とある高校からSGEを実際にやって、見本を見せてほしいとの要望もある。このような実践活動を、ロビー活動に生かしていきたい。

9 認定等について

藤川理事：（資料に基づき説明。特に再審査の場合、今後の学習課題のフィードバックをするが、支部での学習会等の情報を知らせてもらっていれば、「この支部のこの講座で学んでください」と具体的に返すことができる。広報からもあったように、支部の事業を早い時期に本部や支部のHP等に掲載して、情報の共有をしたい。また、中上級認定の要件である論文、著作物、SVに弱さがあるので、支部の活動でサポートしてほしい。次に「中級推薦制度とその基準」について説明。初級から中級に移行する認定者はごく一部で少ない。初級から育てていく教育カウンセラーとしては、その後のステップアップが肝要なので、実績のある初級者が中級となって意欲を増すように、是非支部からもこの「推薦制度」を活用してほしい。等の支部へのお願いがあった。）

10 その他

大友：（兵庫からの話題「ピアヘルパー資格と教育カウンセラー資格の統合策」について説明があった。「ピアヘルパー」と「教育カウンセラー」との間に位置する「教育カウンセラー補」などの資格も含め、ピアヘルパーから初級への流れを結びつける方策を、中高での資格認定も含めて、WGで検討されている。来年のこの会議では提言できるとした。）

11 質疑と全体シェアリング

大友：感想でよいので、遠方の沖縄と初参加した広島の順で一言願いたい。

沖縄：國分先生の意志をつないでいくということを、改めて認識した。交通の便からも、沖縄は自分たち自身で研修の場を設けていかなければならないという使命があるので、本部からの支援を受けながら頑張っていきたい。

広島：昨年、再開を喜んでいただいたと聞き、ここに参加している。SGEで生きるのが楽になった自身の体験もあり、次の世代を育てていくことを含め、繋いでいく気持ちを新たに、持ち帰りたいと思う。

福岡：大学で教員養成の仕事をしているが、そのなかで、学生にも教育カウンセリングを紹介していきたいし、将来、自分の教え子が教育カウンセラーになるようであればいいなと、ワクワクしている。

和歌山：児童相談所で心理士をしているが、そこでの課題は、教育との連携がむずかしいことと感じている。児童虐待のことでも、じつは学級経営や集団場面のなかで、発見や把握ができるのではないかと思う。私の立場から皆さんのなかで仕事をして連携し、教育と福祉の連携ができたかと考えている。

加勇田：お願いを一言。協会ではまだだが、推進協としてSNS（LINE）カウンセリングの取組が始まった。昨年にスタートして、今年の4月には資格制度が始まり、推進協もそこに加盟してSNSカウンセラーの養成をしていくので、協会支部も関心をもってもらいたい。文科省と厚労省が予算化して進めており、SNSカウンセラーの不足も考えられるので、是非協力をお願いしたい。

12 閉会の辞

河野：世の中にはさまざまに悩みを抱えている人が多い。初めての公認心理師資格試験が行われたが、巷のニュースではほとんど報じられず、それほど関心がないということである。しかし、これからの福祉が人生すべてのプロセスにかかわるように、教育カウンセラーもSC任用のロビー活動を超えて、幅広く社会（町）に出て活用されることが大事だ。広く世間に打って出る必要がある。「SGEを持って町に出よう」というキャッチフレーズで、社会のあらゆる場面に広げて

いくのが20周年での私たちの役割ではないかと思う。
(文責：北條博幸)

学会活動報告

令和元年度

日本教育カウンセリング学会理事会 略報告

日 時：2019年5月18日(土) 10:30～11:30

会 場：図書文化社 大会議室

出席者：河村茂雄，伊佐貢一，石塚勝郎，入駒一美，大久保牧子，大越和夫，岡田弘，大友秀人，小野寺正己，荻間澤勇人，加勇田修士，工藤宣子，品田笑子，中村正巳，根田真江，藤川章，藤村一夫，松崎学，水上和夫，水谷明弘，武蔵由佳，吉田隆江（22名）

欠席者：金山元春，杉村秀充，鈴木久子，長しのぶ，西原勝則，森沢勇，米澤好史，米田薫（8名うち委任状6名）

（出席者および委任状29名）

事務局：高野七良見

1 理事長挨拶

初めに，河村理事長より，来年度から学習指導要領が大きく変わることに伴い，体制を固めて学会を運営していきたいとの思いが語られた。また，会費未納が多数ある状況等を見据えながら，次の10年をどう進めていくかを考えていきたいとの思いが語られた。

2 議長選出

議長選出は事務局に一任され，入駒一美地方理事が選出された。

3 審議事項

第1号議案：2018年度事業報告について

（翌5月19日の総会報告に詳細）

第2号議案：2018年度収支決算報告について

- ・荻間澤事務局長より，資料に基づき，2018年度の収支決算報告がなされ，特に収入について，会費収入が予算に比べ少なかったことなどが報告された。
- ・大久保監事より，収支決算書および財務諸表が適正であるとの報告がなされた。
- ・水上理事より，会費収入が前年度と比べて半分であること，それは督促事務が少なかったことによるものなのかとの発言があった。
- ・荻間澤理事より，郵送料を控えながら運営しようと思うと，むずかしい状況があるとの意見が述べられた。

- ・河村理事長より，國分先生がご逝去されたことに伴い，引退されるという方も多いのではないかとの見解が示された。
- ・松崎理事より，多くの学会組織がメールでのやりとりを行っているにもかかわらず，郵送という方法を使用せざるを得ないという考えは，時代錯誤ではないかとの意見がなされた。また，他学会は本学会のように年会費を少額に抑えていない状況であることが述べられ，人件費を抑えることによって事務局機能が不十分となり，督促が行えないという説明は言い訳になっているのではないかと，学会がきちんと機能しているのか心配に思うとの意見が述べられた。事務局がアルバイトの形式でやっていくとしても，管理プログラムやメールを活用しながら，経費がかからない方法を考えていくべきではないかとの意見が述べられた。
- ・荻間澤事務局長より，メールを活用することに関する意見は前にもいただいているが，むずかしい側面があるとの意見が述べられた。また，以前は研究発表大会等において会費の督促をすることもあったが，大会には意欲の高い方々が参加されており，会費が支払われている状況があったため，うまく機能しなかったとの意見が述べられた。3年以上会費未納の方には，退会に関するご連絡をするという形で手続きを行い，徐々に会員が減ってきた際には，会費の値上げに関する検討も必要ではないかとの意見が述べられた。
- ・品田理事より，研修会を増やして学会を運営していくという考えはむずかしいのではないかと，会費を引き上げる決断をする時ではないかとの意見が示された。
- ・荻間澤事務局長より，今年度の課題としたいとの意見が述べられた。
- ・石塚理事より，学会には協会の中から独立したという経緯があるが，学会として独立して採算がとれることを基本としたほうがよいのではないかと，その状況でも参加できる人たちでやっていくしかないのではないかととの意見が示された。
- ・河村理事長より，日本心理学諸学会連合（略称：日心連）への加盟について動いており，学会として一人前の形をとっていく必要があり，その辺りも含めて抜本的に考える時期にきたのではないかととの考えが示された。
- ・大友理事より，國分先生から協会と学会と推進協会は会計を一緒にする検討をせよと言われているが，学会のみで話せる内容ではなく，協会でも議題にしていく必要があるのではないかととの意見が示された。
- ・荻間澤事務局長より，協会の動きも見ながら進めたいとの意見が述べられた。昨年度の会費収入が少なかったという状況については，督促ができなかったということが大きいと，督促すると額は大きく増えるのではないかととの意見が示された。

- ・石塚理事より、協会とは連携しつつ、財政上は独立していく必要があるのではないかと意見が述べられた。
- ・河村理事長より、協会と学会は、アイデンティティは一緒だが、経済的自立がなく依存だけという状況はよくないという意見が述べられた。國分先生は、逝去される前に学会と協会は統合してもよいのではないかと考えを示されたが、具体的にその方針で考えていくのもよいのではないかと、総務委員会と協会からメンバーを出していただき、動き出してもいいのではないかと考えが示された。
- ・第2号議案について、拍手をもって承認された。

第3号議案：2019年度事業計画について

(翌5月19日の総会報告に詳細)

- ・河村理事長より、研究発表大会や教育カウンセリング College等の運営における会場費について、本学会では会場費がかからない会場しか使えていない状況があり、そのような状況で運営していくことは限界なのではないかと意見がなされた。
- ・石塚理事より、研究発表大会を運営した際に、いちばん心を使う部分は会場費と人集めであり、会場費が抑えられると、研究発表大会の運営も円滑にいく側面があるとの意見が述べられた。今日、会場費なしで運営することはむずかしいため、そのようなことも含めて財政について検討していく必要があるのではないかと意見が述べられた。
- ・品田理事より、会費が潤沢ならば良いが、厳しい状況であるならば、費用対効果を考えなければ運営はできないのではないかと意見が述べられた。
- ・河村理事長より、公開講演&シンポジウムにおいても、大学院生の尽力により良質な会場が無料で借りられている由が述べられた。
- ・第3号議案について、すべての議案が拍手をもって承認された。

第4号議案：2019年度収支予算案について

(翌5月19日の総会報告に詳細)

4 報告事項

(1) 一般社団法人日本心理学諸学会連合への加盟について

- ・小野寺理事より、資料に基づき、一般社団法人日本心理学諸学会連合への加盟についての説明がなされた。
- ・松崎理事より、総会での承認を経てから予算に組み込むほうが、筋が通るのではないかと意見がなされた。
- ・荻間澤理事より、当初は審議に入れていたが、①学会員のためになるということ、②負担金が高額ではないことから、ある程度進めていき、そのうえで報告という形でご承認をいただければよいのではないかと

考えのもと、報告の形で提案されたことが述べられた。

- ・河村理事長より、手続き的には松崎先生がおっしゃることが筋であるが、公認心理師の件で日心連がイニシアティブをとっていることも踏まえて、手続きを進めることについてご理解をいただきたいとの意見が述べられた。

(2) 2019年度学会役員（常任理事）について

(翌5月19日の総会報告に詳細)

(3) 入会審査報告、会員数等について

- ・荻間澤事務局より、資料（回覧資料を含む）に基づき、新規入会者の状況、会員総数、会費の入金状況等についての報告がなされた。
- ・大友理事より、学会への入会や研究発表大会での発表においては、一人で動くにはハードルが高い側面があり、サポートをする人員が必要ではないか、そうでないと会員は増えていかないのではないかと意見がなされた。

令和元年度 日本教育カウンセリング学会総会 略報告

日 時：2019年5月19日(日) 10:00～11:00

会 場：早稲田大学早稲田キャンパス14号館101教室

出席者：35名

1 理事長挨拶

初めに、河村理事長より、新しい元号が始まり新たな旅立ちだが、会費や人数的にも芳しくない状況であること、そのようななかでも、本学会は若い力を入れて、リセットしてやっていきたいとの抱負が述べられた。

2 議長選出

議長選出は事務局に一任され、会員の本田真氏が議長として選出された。

3 審議事項

第1号議案：2018年度事業報告について

- ・2018年度事業報告について、資料に基づき、各委員長より説明がなされた。
- ・小野寺総務委員長より、総務委員会では、①倫理規定を他学会との整合性を合わせて策定していくこと、②2018年度入会案内の作成を、早稲田大会の実施が決定してから作成したため、年度をまたぐ形となったことが報告された。
- ・武蔵編集委員長より、編集委員会では、①学会誌『教育カウンセリング研究』第9巻を刊行したこと、②学会誌『教育カウンセリング研究』第9巻、第10巻への投稿論文の審査が行われたこと、③投稿規定の改正として、他学会の規定を参考に、文献の書き方などを最

新の形に改訂したこと、④J-STAGEへの論文登載手続きを進めており、現在は著者に対するオンライン公開の許諾を得られた論文の掲載を進めたことなどの報告がなされた。

- ・伊佐研究委員長より、研究委員会では、①第12回公開講演&シンポジウムを開催したこと、②愛知研究発表大会において研究相談会を実施したこと、③教育カウンセリングCollegeを計画したことなどの報告がなされた。
- ・加勇田広報委員長より、広報委員会では、①会報53～55号を作成したこと、②HP管理として、最新の情報を随時更新し、会員への情報提供につなげたこと、③2018年度「支部活動報告」の作成が行われたことなどの報告がなされた。

第2号議案：2018年度収支決算報告について

- ・荏間澤事務局長より、資料に基づき、2018年度の収支決算報告がなされ、特に収入については、①督促回数が少なかったため、会費収入が予算に比べ少なかったこと、②2018年度から「学会研修会」を開催し、五十数名の参加があったことにより収入となったことが報告された。また、支出については、①査読のための会議が必要になったため編集委員会の費用が増えたこと、②事務の量が増えたため事務局アルバイト料が増えたことが報告された。さらに、収入より支出が多くなり赤字になっているが、適正に収入が入れば赤字はなくなる見込みであることが報告された。
- ・大久保監事より、収支決算書および財務諸表が適正であるとの報告がなされた。
- ・第1号議案、第2号議案について、質問や意見等は特になく、すべての議案が拍手をもって承認された。

第3号議案：2019年度事業計画について

- ・2019年度事業計画について、資料に基づき、各委員長より説明がなされた。
- ・小野寺総務委員長より、総務委員会では、①会則等、諸規定の整備について、倫理規定を決める予定であること、②会を存続させるため、会費の徴収をどうするかを、協会と共に取り組んでいくこと、③早稲田大会の内容を入れた入会案内が作成されたことについて説明がなされた。
- ・武蔵編集委員長より、編集委員会では、①学会誌『教育カウンセリング研究』第10巻を秋から冬にかけて刊行する予定であること、②学会誌『教育カウンセリング研究』第10巻、第11巻への投稿論文の審査を進めていくこと、③投稿規定の改正・整備を継続していくことは報告された。
- ・伊佐研究委員長より、研究委員会では、①本日、第13回公開講演&シンポジウムを開催すること、今回より

公開講演&シンポジウムは「キャリア発達」のテーマで三か年行うこと、②研究相談会を実施すること、③教育カウンセリングCollegeを会津大学で開催すること、④教育カウンセリングCollegeは研究活動の底上げのために行われているが、費用対効果も含めて検討することの報告がなされた。

- ・加勇田広報委員長より、広報委員会では、①会報56号～58号の発行、②HPのリニューアルを行う予定であるとの説明があった。

第4号議案：2019年度収支予算案について

- ・荏間澤事務局長より、資料に基づき、2019年度の収支予算案についての説明がなされ、特に収入については、会費収入の徴収を確実にしていくこと、支出については、日本心理学諸学会連合への加盟のために負担金が増加することが説明された。
- ・第3号議案、第4号議案について、質問や意見等は特になく、すべての議案が拍手をもって承認された。
- ・事務局からの提案、会場からの提案等はなく、審議を終了した。

4 報告事項

(1) 一般社団法人日本心理学諸学会連合

- ・荏間澤事務局長より、日本心理学諸学会連合への事務手続きを4月に開始したことが報告された。公認心理師等の情報取得のため、常任理事会において承認されたために、諸学会連合への参加が決定されたことが報告された。
- ・学会員より、富山の臨床心理士会が名称を変更し富山県公認心理師会にしたこと、臨床心理士のみが公認心理師ではなく、さまざまな心理職が参加できるようにしてほしいとの意見が述べられた。
- ・荏間澤事務局長より、ニューズレター等で今後の進捗を報告していくことが説明された。

(2) 2019年度学会役員（常任理事）について

- ・荏間澤事務局長より、資料に基づき、2019年度学会役員について報告がなされた。編集委員が査読等の業務で人数確保が必要なため、編集委員として深沢和彦会員、熊谷圭二郎会員を委員とすることが報告された。

5 その他

- ・河村理事長より、今後も会を進めていきたいために、会費の値上げをしていくことも視野に入れ、組織を運営していくという意見が述べられた。
- ・荏間澤事務局長より、35名の参加があったため本議事は承認されたこと、本日の午後の催しのタイムスケジュール等について、説明がなされた。

(文責：高野七良見・荏間澤勇人)

一般社団法人 日本スクールカウンセリング 推進協議会 活動報告

定時総会 略報告

日 時：2019年6月24日(月) 18:00～18:30

会 場：図書文化社 大会議室

社員総数：7名(議決権数 7個)

出席社員：6名(当日出席社員数 6名)

当日出席社員：

栗原慎二(日本学校教育相談学会)

石隈利紀(日本学校心理士会)

河野義章(特定非営利活動法人日本教育カウンセラー協会)

下村英雄(日本キャリア教育学会)

河村茂雄(日本教育カウンセリング学会)

飯田俊穂(日本カウンセリング学会)

当日欠席社員：

黒田美保(日本臨床発達心理士認定運営機構日本臨床発達心理士会)

出席役員：糟谷恭子、田邊昭雄、田村節子、西山久子、
渡辺芳生、会沢信彦、藤川章、荏間澤勇人、
熊谷圭二郎、伊澤成男、金谷京子、東敦子、
中村道子、新井邦二郎、池場望、加勇田修士、
新井雅、東則孝(理事)

根本節子、岡田弘(監事)

議 長：栗原慎二(副理事長・社員)

議事録作成者：石隈利紀(理事長)

議案の審議および結果

1 開 会

定刻に至り、進行役の東則孝が開会を宣し、本日の定時総会は、社員である正会員7名中6名が出席し、定款第17条1項による定足数を満たしており、有効に成立した旨を告げた後、代表して石隈利紀が開会の辞を述べた。

2 議長選出

進行役から、議長の選出方法について説明し、定款第15条に基づいて理事長である石隈利紀が社員(副理事長)である栗原慎二を指名し議場に諮ったところ、全員異議なくこれを承認し、栗原慎二もこれを承諾し議長席に着いた。

3 議事録署名人の選出

議長である栗原慎二は議案の審議に先立ち、本日の議事の経過をまとめるにあたり、定款第20条第2項に基づき、議長である栗原慎二と、議事録署名人として議長が東則孝を指名し議場に諮ったところ、全員異議なくこれを承認し、東則孝もこれを承諾した。

4 議案の審議および結果

第1号議案：平成30年度事業報告及び収支決算報告書承認の件

議長は、本件議案についての説明を東則孝に求めた。東則孝は、平成30年度事業報告および収支決算報告書の説明を行い、承認を求めた。続いて監事である根本節子が、平成30年度事業報告および収支決算報告書に関して、正確妥当である旨の監査報告を行った。

議長がこれを議場に諮ったところ、全員異議なく原案どおり承認可決された。

第2号議案：理事および監事の選任の件

議長は、本件議案についての説明を東則孝に求めた。東則孝は、役員改選にあたり、理事として、栗原慎二、糟谷恭子、田邊昭雄、石隈利紀、田村節子、西山久子、下村英雄、三村隆男、渡辺芳生、河野義章、会沢信彦、藤川章、河村茂雄、荏間澤勇人、熊谷圭二郎、飯田俊穂、伊澤成男、井ノ山正文、黒田美保、金谷京子、東敦子、中村道子、新井邦二郎、池場望、加勇田修士、八並光俊、新井雅、東則孝の全28名の選任と、監事として根本節子、岡田弘の全2名の選任を求めた。加えて、全28名の理事のうち、糟谷恭子、田邊昭雄、田村節子、西山久子、渡辺芳生、会沢信彦、藤川章、熊谷圭二郎、伊澤成男、井ノ山正文、金谷京子、東敦子、新井雅の13名が新任であることも説明した。

議長がこれを議場に諮ったところ、全員異議なく原案どおり承認可決された。

5 議長解任

以上をもって、2019年(令和元年)度定時総会の議事をすべて終了したため、議長は降壇した。

6 閉 会

司会者が、閉会を宣し、2019年(令和元年)度定時総会を終了した。

第2回理事会 略報告

日 時：2019年6月24日(月) 18:30～19:30

会 場：図書文化社 大会議室

出席者：理事総数28名 定足数15名

出席理事：栗原慎二、糟谷恭子、田邊昭雄、石隈利紀、田村節子、西山久子、下村英雄、渡辺芳生、河野義章、会沢信彦、藤川章、河村茂雄、荏間澤勇人、熊谷圭二郎、飯田俊穂、伊澤成男、金谷京子、東敦子、中村道子、新井邦二郎、池場望、加勇田修士、新井雅、東則孝

以上24名

出席監事：根本節子、岡田弘

以上2名

出席顧問：岡田守弘、岸俊彦、木村周、吉原寛

以上4名

議案の審議および結果

理事28名のうち24名が出席、定款31条1項（過半数の出席）により理事会の成立が確認された。

続いて、定款30条1項の規定に基づき、石隈利紀理事長は、議長として栗原慎二副理事長を指名し、これが全員一致で承認されたため、栗原慎二副理事長が議長席に着き、開会が宣せられ、議案の審議に入った。

定款32条2項により、石隈理事長と根本節子監事と岡田弘監事が議事録署名人となることが確認された。議事録作成は伊澤成男理事が担当することとした。

第1号議案：役員選定の件

(1) 理事長（代表理事）の選定について

東則孝事務局長より、定款第21条2項ならびに第22条2項に従って、理事長（代表理事）に下記の者を選定することが提案され、審議を経て承認可決された。被選者は就任を承諾した。

石隈利紀（一般社団法人学校心理士認定運営機構理事長）

(2) 副理事長の選定について

東事務局長より、定款第21条3項ならびに第22条2項に従って、副理事長に下記6名を選定することが提案され、審議を経て承認可決された。出席した被選者は各々就任を承諾した。

栗原慎二（日本学校教育相談学会会長）

下村英雄（日本キャリア教育学会会長）

河野義章（NPO法人日本教育カウンセラー協会会長）

河村茂雄（日本教育カウンセリング学会理事長）

飯田俊穂（日本カウンセリング学会認定カウンセラー会会長）

黒田美保（日本臨床発達心理士認定運営機構日本臨床発達心理士会幹事長）

(3) 業務執行理事の選定について

東事務局長より、業務執行理事に定款第21条4項ならびに定款第22条2項に従い、下記21名を選定することが提案され、この承認を求めたところ、全員異議なく、承認可決された。

糟谷恭子、田邊昭雄、田村節子、西山久子、三村隆男、渡辺芳生、会沢信彦、藤川章、荻間澤勇人、熊谷圭二郎、伊澤成男、井ノ山正文、金谷京子、東敦子、中村道子、新井邦二郎、池場望、加勇田修士、八並光俊、新井雅、東則孝

(4) 事務局長の任命について

東事務局長より、事務局長に定款第45条3項に従い、下記の者を任命することが提案され、この承認を求めたところ、全員異議なく、承認可決された。

東則孝（一般社団法人日本スクールカウンセリング推進協議会理事）

(5) 石隈理事長による活動方針の説明

石隈理事長より、当協議会の10年間を見通す「日本ス

クールカウンセリング推進協議会2025PLAN」が説明され、全員異議なく、承認可決された。

第2号議案：各種委員会の委員委嘱の件

東事務局長より、事業推進機関として、定款第33条1項に従い、別紙のとおり各委員会を組織するとともに、別紙のとおり委員を委嘱することが提案された。加えて、本日以降に委員の推薦を構成団体から受けるなどした場合は、次回理事会で正式に委嘱を行う以前に、仮委員として活動に参加する可能性があることが説明された。

河村茂雄副理事長より、構成7団体の均衡を保つ形で委員会が運営されていく意義が確認された。

提案について承認を求めたところ、全員異議なく、承認可決された。

第3号議案：顧問の件

東事務局長から、顧問規程の改正案と、それに基づいて、以下の11名に関する顧問の推薦案が提案された。

青木美穂子、嶋崎政男、清水勇、清水井一、砥柄敬三、岡田守弘、岸俊彦、木村周、田上不二夫、新井肇、吉原寛

提案について承認を求めたところ、全員異議なく、承認可決された。

第4号議案：事務局強化の件

東事務局長から、事務局機能を強化するために、事務局（分室）の開設準備として「リノセゾン301号室」（東京都文京区大塚1-1-9）の賃貸契約を行ったことが報告された。加えて、事務局員を募集するにあたり、要件が固まり次第、理事に概略を連絡するので、適任者に声がけをしてほしいと述べた。報告に対して、全員異議なく、承認可決された。

第5号議案：各委員会の報告

渉外委員会に関して、中村道子渉外委員長から、渉外活動の現状について報告がなされ、渉外活動への理解と協力を求める要請がなされた。

研修委員会に関して、新井邦二郎研修委員長から、今後予定されている当協議会主催の研修会について、集客状況が報告された。特に6月29日公開シンポジウムには、さらなる集客への協力を求めた。

第6号議案：その他

東事務局長が、当協議会が今後取り組む新しい事業について、これまで寄せられているアイデアとして「スーパービジョン（フィードバック）事業」「教育委員会対象の研修受託事業・講師派遣事業」を紹介し、さらなる検討と、新しいアイデアの集約を呼びかけた。

日本教育カウンセラー協会 20周年記念行事の振り返り

20周年記念事業委員会委員長 諸富祥彦

日本教育カウンセラー協会の20周年を記念して、2つの行事が行われました。

1つは、20周年記念誌の発行です。池場相談役、加勇田理事に力を発揮していただきました。20年間の教育カウンセラー協会の活動について、特にここ5年を中心に報告されました。20周年の語り方もさまざまであり、多くの方の文章に自己開示が見られた点に、教育カウンセラー「らしさ」を感じることができました。

もう1つは、20周年記念パーティーです。2019年5月19日（日）17時～19時に、リーガロイヤルホテル東京を会場に、約100名の参加者を迎えて盛大に行われました。加勇田理事、吉田理事の進行のもと、あたたかい雰囲気が進んでいきました。

ハイライトは、5名の参加者による5分間トークでした。それぞれが、自分と協会、自分と國分康孝元会長との思い出について語り、協会のこれまでと協会のこれからについて、ビジョンをシェアしていきました。ちょうど、國分康孝先生が亡くなられて1年経つ時期にこの会が開かれたこともあって、先生の一周忌、「國分先生を偲ぶ会」をも兼ねた会にもなりました。

いろいろな方の話を聴きながら、天から「おい、〇〇、結論から話せ」「〇〇、君は今日、いいことを言うなあ」といった、國分先生の言葉が聞こえてくるような思いがしました。私としては、あの会は、まあ及第点だったように思いますが、國分先生が見たら何点をつけられたのかが、気になるところです。



最大の成果は、創立20周年を記念して、國分康孝賞を設け、授与することができたことではないでしょうか。協会に長年にわたって貢献してきた人に國分賞を贈りたい、という國分康孝先生の「遺言」を果たすことができました。ホッとしています。本部推薦として、理事・相談役・監事・評議員を務められた方に、支部推薦として、支部立ち上げから15年以上リーダーとして活動されている方、またはそれと同等の活動をされている方を選定しました。

20周年記念パーティーで残念だったのは、来賓としてお声をおかけした馳浩先生、國分久子先生、國分留志さんが会場に来られなかったことです。また何かの折にきっとお会いできると信じています。

個人的にとってもうれしかったのは、國分康孝先生の写真、サインが入ったJECAロゴ入クリアファイルと、國分康孝先生のブロマイドがもらえたことです。「生涯、國分康孝先生のファン」である自分に改めて気づいた瞬間でした。

今回の20周年をもっとも報告したいのも、やはり國分先生です。

「國分先生、協会、20年を迎えることができましたよ！成人式を終えましたよ。これからは、自分たちで成長していきますので、天から見届けてください！」



2019-2020年度

一般社団法人日本スクールカウンセリング推進協議会
役員ならびに組織

●役 員

役 職	氏 名	所 属
理事長 (代表理事)	石隈 利紀	一般社団法人学校心理士認定運営 機構理事長
副理事長	栗原 慎二	日本学校教育相談学会会長
	河野 義章	NPO法人日本教育カウンセラー協 会会長
	下村 英雄	日本キャリア教育学会会長
	河村 茂雄	日本教育カウンセリング学会理事長
	飯田 俊穂	日本カウンセリング学会認定カウ ンセラー会会長
	黒田 美保	日本臨床発達心理士会幹事長
理 事	糟谷 恭子	日本学校教育相談学会事務局次長
	田邊 昭雄	日本学校教育相談学会学会誌作成 委員会副委員長
	田村 節子	日本学校心理士会副会長
	西山 久子	福岡教育大学大学院教授
	三村 隆男	日本キャリア教育学会前会長
	渡辺 芳生	日本キャリア教育学会認定委員長
	会沢 信彦	NPO法人日本教育カウンセラー協 会理事
	藤川 章	NPO法人日本教育カウンセラー協 会理事
	荏間澤勇人	日本教育カウンセリング学会事務 局長
	熊谷圭二郎	日本教育カウンセリング学会編集 委員
	伊澤 成男	日本カウンセリング学会常務理事
	井ノ山正文	日本カウンセリング学会東京都支 部長
	金谷 京子	日本臨床発達心理士会副幹事長
	東 敦子	日本臨床発達心理士会監査
	中村 道子	NPO法人日本教育カウンセラー協 会相談役
	新井邦二郎	東京成徳大学学長
	池場 望	NPO法人日本教育カウンセラー協 会相談役
	加勇田修士	特定非営利活動法人ストレス対処 法研究所理事長
	八並 光俊	東京理科大学教授
	新井 雅	跡見学園女子大学准教授

事務局長 兼任	東 則孝	NPO法人日本教育カウンセラー協 会事務局長
監 事	根本 節子	日本学校教育相談学会名誉会員
	岡田 弘	NPO法人日本教育カウンセラー協 会相談役

●組 織 (○は委員長, ◇は副委員長)

【企画委員会】

○石隈利紀 八並光俊 三村隆男 藤川 章
荏間澤勇人 飯田俊穂 鈴木教夫

【認定委員会】

○河野義章 八並光俊 会沢信彦 池場 望
新井邦二郎 熊谷圭二郎 飛田浩昭 有村久春
山崎洋史

【渉外委員会】

○中村道子 田邊昭雄 田村節子 新井邦二郎
加勇田修士 堀田美枝子 藤川 章 井ノ山正文

【研修委員会】

○新井邦二郎 加勇田修士 会沢信彦 川崎知己
藤岡秀樹 伊澤成男 飛田浩昭 鈴木教夫

【スクールカウンセラー促進戦略本部】

○飯田俊穂 吉田隆江

【研究委員会】

○八並光俊 ◇西山久子 深沢和彦

【広報委員会】

○池場 望 ◇新井 雅 田村節子 渡辺芳生
加勇田修士 田中 充

【支援事業委員会】

○加勇田修士 八並光俊 藤川 章 丸山里奈
糟谷恭子

【倫理委員会】

○石隈利紀 栗原慎二 河野義章 河村茂雄
下村英雄 飯田俊穂 黒田美保

【事務局運営支援委員会】

新井邦二郎 中村道子 池場 望

【学術顧問】 奈須正裕

ご案内

■第10回公開シンポジウム

「教育機会確保法を踏まえた不登校対応——チーム学校として——」

日 時：2019年8月24日(土) 13:00～16:30

会 場：大手前大学

基調講演

「不登校対応におけるチーム学校の役割」藤平敦

シンポジウム

「教育機会確保法を踏まえた不登校対応——チーム学校として——」嶋崎政男・佐藤真子・林聖子

次の57号にて詳細をご報告いたします。

■公認心理師現任者講習会の計画

一般社団法人日本スクールカウンセリング推進協議会は、3度目となる「公認心理師現任者講習会」を、以下の概略で申請しました。区分G(現任者)で2020年度試験の受験を検討されている方は、ご検討いただけますと幸いです。

なお、厚生労働省・文部科学省の指定を受けることが開催条件となります。

また公認心理師試験を受験できる可能性のある方には、受験をおすすめしております。心理と教育をつなぐ橋渡し役として、学校を支援し、後続の道を切り開いていただけますとありがたく存じます。

【公認心理師現任者講習会の計画概略】

○予定日時

2019年11月30日(土)、12月1日(日)、12月21日(土)、
12月22日(日)それぞれ9:00～18:00

○予定会場

東京成徳大学 十条台キャンパス

〒114-0033 東京都北区十条台1-7-13

JR埼京線「十条駅」南口下車徒歩5分

JR京浜東北線「東十条駅」南口下車徒歩10分

<https://www.tsu.ac.jp/juken/access/tabid/258/Default.aspx>

※受付開始は10月半ばの予定です。

※本協議会が厚労省・文科省の指定を受けられることが前提条件です。

■SNSカウンセラー養成講座(24名)

SNSカウンセラーは2019年4月から認定が始まりました。今後、全国で行われるSNSカウンセリングのカウンセラーに必要な資格となることが期待されています。日本スクールカウンセリング推進協議会では、ガイダンスカウンセラーの方々に対して、SNSカウンセリングの能力獲得を支援し、SNSカウンセラー資格取得の機会を提供いたします。

2019年6月30日、「ガイダンスカウンセラー実践力強化研修・コースB」にて、5時間の研修を行いました。その後7月21日、「SNSカウンセラー養成講座」5時間を実施し、合計10時間の研修を受けたガイダンスカウンセラーの方は、資格取得の申請をすることができます。

研修を受けた方の声として、以下のようなものがありました。

[1回目：6/30]

・先生のお話は論理的で大変理解しやすかったです。この講義を受けるまでSNSカウンセリングのむずかしさについてイメージできず、もっと簡単に考えていた自分に気づきました。2回目も受講するつもりでいますので、それまでに内面の準備を整えていきたいと思えます。次のロールプレイを含んだ研修がこわい面もありますが、楽しみでもあります。

[2回目：7/21]

・対面相談とは異なる技法が必要であることを知りました。文章力が必要です。なかなかうまい言葉がその場に出てこなかったです。友人とのLINEでさえ何度か読み返してから送っている現状なのに、相談者がひたすら返信を待っていると思うと、タイミングがむずかしく思われます。ロールプレイで気付いたことは、待っている間にそれまでの文章を戻って読むことができるので、見逃した言葉や取り違えた言葉がないか、確認できるのが対面と違うことだと思いました。

・「2人同時対応」の様子がイメージできました。しかし集中力を考えると相当むずかしいと感じました。相談システムとカウンセラーの力量が整わないと、相談者に申し訳ないと思います。1分以内に返信するという壁を破ることができませんでした。



NPO法人日本教育カウンセラー協会 〒112-0012 東京都文京区大塚1-4-15 アトラスタワー茗荷谷3F

TEL：03-3941-8049 FAX：03-3941-8116 E-mail：jim@jeca.gr.jp URL：http://www.jeca.gr.jp

日本教育カウンセリング学会 〒112-0012 東京都文京区大塚1-4-15 アトラスタワー茗荷谷3F

TEL・FAX：03-3941-0213 E-mail：jsec.jimu@gmail.com URL：http://jsec.gr.jp/

教育カウンセラー第56号 2019年8月31日発行

発行人 河野義章 編集 JECA広報委員会(加勇田修士、池場望、吉田隆江、楠元奈津子)

JSEC広報委員会(加勇田修士、水谷明弘、松崎学)

印刷 スピックバンスター株式会社